

番出土のトルコ文佛典の斷簡にも *kisän* の名の見えて居るのがあつて、そうしてそれが矢張り曲先を指したのであると思はしめる文句を伴つて居るのは、かゝる考を否定するに足ると信ずる。その佛典といふのは、性質上本生談の種類に屬すると思はれる一葉で、表裏両面に十七行宛を残してゐる斷片であるが、その一面の第六行から第八行にかけて *q(a)lti kidin [ä]nätäk ilintä kauravi atly ilig bäg avqa barip azip* 即ち「西(或は後)の印度國に於て *kauravi* 王 (*kaurava* = 具盧王) が獵に行きて迷ひて「云々と見える。「西の或は後方の印度の國に於て」といふ書き方は多分この佛典が印度以外の地で選述されたであらうと思はしめるものであるが、更にその他面の第八行から九行にかけては *kisän ulus-ta suvarnapuš....atly ilb är (sic. ilig bäg) oyrinta....* 即ち「*Kisän* 國に於て *Suvarnapuš....* といふ王の時」云々と記されてある。²⁰ 此の *kisän* を前の摩尼教文書に見えるのと同じく曲先を指したものと見ると、曾て ²¹*Sylvain Lévi* 氏の論述したやうに、唐の太宗と同時代の龜茲の王であつた蘇伐疊 (*Svarnate*) の父に蘇伐勃駛即ち玄奘の西域記に金花王といふ譯名を載せてある *Svarnabūspe = Suvarnapūspa* 王があつたことが明らかであるから、此の斷簡に記されてあるのはこれに應ずるものと認めることが出来る。斷簡には *suvarnapuš....* だけが見えて居るが、殘缺の空間は丁度二字程に當るから、これが *pa*, または *pe* の一綴であつたことは疑を容れない。尤も *Gandhāra* の *Kusana* にも *Suvarnapūspa* といふ王があつたとすれば、その何れとも定め難いであらうが、余の知る限りではかゝる事實はないやうである。尙ほ考へて見なければならぬことは、かく此の佛典斷簡の *kisän* を曲先と解釋して、果して *Müller* 氏の發表した佛教文書の *kisän* をも差支なく解き得られるかどうかである。その文書の第一には「此の經を *kisän* の語から *Barcuq* の語 || 氏によればトルコ語と